

派遣国	タイ	派遣都市	ターク県メーソット郡
出国年月日	2018年2月26日	帰国年月日	2018年3月25日
法政大学との共催団体名(受入団体名)	シャンティ国際ボランティア会(SVA)		
主な活動内容	ミャンマー難民に対する初等教育改善を中心とした教育支援活動、コミュニティ図書館活動		

1. 活動内容

事務所での活動と、難民キャンプでの活動に分けて書きます。

事務所での主な活動は、「難民の現状を知るために資料を読む」「難民キャンプに支給する、日本の絵本に張り付ける翻訳シールを切る」「キャンプ内で行われたアンケート結果の入力」「資料の翻訳(日本語から英語)」「SVAのフェイスブックやブログ記事の更新」でした。これらの活動は主に1週目と4週目に行いました。

難民キャンプでは、キャンプ内で行われるSVAの活動の写真を撮影しました。私が見させていただいた活動は、キャンプ内の図書館で行われる四半期会議と技術交換会です。いずれもSVA職員と難民で構成される図書館員によって開催されます。四半期会議では、図書館でなにか問題はないか、要望はないかなどが、多くの難民の母語であるカレン語で話し合われます。会議の内容は、あとからSVA職員の方が英語で教えてくださいるので、それをメモして、事務所に戻ってからまとめました。技術交換会では、キャンプ内に複数ある図書館の図書館員が1つの図書館に集まって、お互いに交流をしていました。またSVA職員が図書館員に対し、読み聞かせの仕方やゲーム・歌を教えていました。私もゲームの一部参加させてもらいました。撮影した写真はフェイスブックやブログで使用されます。これらの活動は、主に2週目と3週目に行いました。

また、時間があるときには英語を喋れる難民がキャンプ内を案内してくれたり、話をしたり、折り紙を一緒に折ったりしたため、難民たちと交流する機会もありました。

2. 特筆すべきエピソード

- 今の図書館の形ができるまでの地道な活動：

私はタイ語が読めないので、レストランのメニューや看板はわかりません。タイに行ったばかりの頃は「この環境こそが、文字が読めない人が置かれている環境なんだ。なんて不便なんだ」と思っていました。しかしその話をSVA事務所の所長にしたところ、「そうじゃない。あなたは教育を受けてきたから文字を読めない不便さが分かる。でも教育を受けてこなかった人たちは文字が読めなくても生きられるから、それを不便だとは思っていない。SVAが難民キャンプに図書館を作るといったとき、文字を読めない人たちは、自分たちの子供が図書館に行って家事をしなくなることを嫌がった。図書館事業に反対した。だから彼らの説得からしなければならなかった」ということを教えてくださいました。

プログラム前に、難民キャンプに図書館ができた頃の話を取録した本を読んでいたので、「苦労があった」こと自体は知っていました。しかし図書館で行われていた活動の中では、多くの人が笑顔で活動を楽しんでおり、本に書いてあったような苦労は見えませんでした。そんな中で所長さんの言葉を聞き、私が見た図書館の姿にたどり着くまでには、教育の大切さを地道に説得することから始まる、多くの苦労があったのだということを改めて感じました。

・そこが難民キャンプであるということの実感：

私の特技は絵を描くことです。プログラムでもその特技を生かしたい、子供たちとコミュニケーションを取りたいと思い、難民キャンプで私を珍しそうに見ていた子供たちを集めて一人一人の似顔絵を1枚の紙に描きました。似顔絵を描いているときは笑顔でうれしそうにしている彼らでしたが、絵が描かれた紙を彼らのうちの1人に渡すと、たちまち奪い合いになり、紙はビリビリに破かれてしまいました。自分の似顔絵の部分だけを切りとって分け合えばいいのに「ゆずりあい」とは程遠い光景でした。そのとき私は「ここは村のように見えるけれど、物資の配給で命をつなぐ難民キャンプなんだ、限られた物資や娯楽しか与えられない子供たちの心はまだまだ貧しいのかもしれない」と感じました。

SVAの図書館活動により、子供たちはたくさんの絵本を読むことができます。それは難民キャンプの中の数少ない娯楽の一つです。絵本や図書館での活動が、子供たちの心を少しでも豊かにしてほしいと願ってやまない出来事でした。

・伝えることと、支援をよびかけること

プログラム期間中に、SVAのフェイスブックやブログの記事を担当させていただく機会が何度かありました。SNSによる発信は、難民キャンプの状況を伝え、支援を呼び掛ける重要なツールです。多くの人に投稿を見てもらうためには、読みやすく簡潔な文章・見る人の心に訴える写真を使う必要があります。そこで悩んだのが、SNSの投稿では私が見た難民キャンプの姿を伝えきれないことでした。何を書いても、写真の数も文字数も足りないのです。たとえば見る人の心に訴えかけ、支援をしてもらうために、貧しい暮らしを送る難民の写真を使うことは効果的です。しかし私が見た難民の姿はそれだけではなく、笑っている姿や真剣に会議に臨む姿もあるのです。でも支援をもらうためには貧しい難民を映した写真を使うのがいい。文字や写真に限りがある中で、伝えたいことをすべて伝えられないのは非常にもどかしかったです。

だからと言って、多くの情報を載せられる論文がいいとは言い切れません。論文を書いたとしても、それを読んでくれる人はSNSに比べて格段に少なくなるからです。「伝えたいことを書けるけれど発信力が弱く支援が集まらない論文」「伝えたいことは書けないが発信力があり支援を集められるSNS」、その2つの間での葛藤は大きかったです。

私がかつた1か月の活動でそう感じたのだから、国際協力の現場で働く人が抱く葛藤はもっと大きいのだと思います。私は将来国際協力を仕事にしたいと思っているので、この葛藤は将来また付きまとうことになるでしょう。「何かいい方法はないのか」というその問題は、今からでも考えられることなので、もっと追求したいです。

3. 苦労したこと

苦労というほどではないかもしれませんが、少し大変だったかな、ということは2つあります。

1つめは、SVA職員との英語での会話です。私が難民キャンプに関して思ったこと、疑問に思ったことはたくさんあったのですが、うまく英語が出てこず、一回聞きたいことを整理してノートとペンを持って聞きに行くということが何度かありました。職員の方は丁寧に答えてくださったのですが、まるでインタビューのようなかたい雰囲気になってしまいました。私の英語力がもっとあれば、質問以外の雑談もたくさんできたのに、と悔しい思いをしました。

2つ目は体調管理です。プログラムの中で、車で何時間もかけて難民キャンプに行くことが2度ありました。慣れない気候や環境・食事に加え、もともと車酔いしやすいこともあり、疲労がたまって体調を崩しそうになることがありました。そのためタイではたくさん食べ、たくさん寝ることを特に大事にしました。おかげで寝込むような体調不良はなく、1か月間過無事に過ごすことができました。

4. 身に付いたこと

たとえ慣れない環境でも、自分にできることを探す力が身につきました。

例えば難民キャンプでは、彼らと言葉では意思疎通ができないので、最初は戸惑いました。ですが SVA 職員に通訳をお願いして、私に似顔絵を描いてほしい人を呼び掛ける、ということをやりました（特筆すべきエピソードで書いたキャンプとは別の場所でのことです）。30 分ほどの時間で 5 人以上集まってくださり、書いた絵はとても喜んでもらえました。職員の方が、ある一人が言っていた言葉を「この絵があればあなたのことを忘れないわね、ありがとう」と通訳して伝えてくださったときはとても嬉しかったし、自分の特技がここで使えたという新鮮な驚きもありました。

この経験から、慣れない環境・知らない環境でも自分の特技や強みを知っていれば、今の自分にできることを見つけられることが分かりました。

5. 今回の経験を経て感じる「グローバル人材」像とは何か

広い視野を持ち、目の前にあることをきちんとこなせる人です。

例えば難民キャンプは、ミャンマー民主化の影響をうけ、じきに閉鎖されるだろうとされています。しかしキャンプの閉鎖後、難民全員がミャンマーに帰るわけではありません。タイに残りたい人もいれば、第三国に定住する予定の人もおり、難民たちの将来の見通しが立たないままです。そのうえ彼らを取りまく情報はリアルタイムで更新されています。そのため常にアンテナを張っていなければキャンプの状況はわからなくなってしまい、適切な活動ができなくなってしまいます。

SVA 職員の方たちは難民を取り巻く変化の激しい状況を把握したうえで、難民たちに「将来の不安はないか」「キャンプでの生活はどうか」など、会議の前後にも熱心に話を聞いていました。そういった会話は、信頼関係を築くため、難民要望や思いを知るため、図書館活動を円滑に進めるために重要なことだそうです。事務所では、キャンプがなくなった後にも図書館活動の技術を残すために、納得いくまで何度もやり直ししながら、読み聞かせの技術を伝えるビデオの撮影を行っていました。

「話を聞く」「ビデオを撮影する」。そういった一つ一つのことは小さな活動ですが、難民が置かれている状況が不安定な中で、SVA 職員が難民たちの今と将来のために、彼ら自身にできることに對して最善を尽くしているのだと思います。国際協力の現場で実際に活動する SVA 職員はまさにグローバル人材です。政治や人の動きといった難民に関するマクロな情報を把握したうえで、今できることに一人一人が向き合っていたため、「広い視野を持ち、目の前にあることをきちんとこなせる人」が「グローバル人材」であると考えました。

6. 後輩へのメッセージ

わたしがこの文章で書き切れなかったことはまだまだたくさんあります。

国際協力に興味がある、いつか関わりたいという人なら、今このプログラムに参加して、たくさん現場を見てきてほしいです。このプログラムではそれができるので、まさに「百聞は一見に如かず」だと思います。

私にとってこの 1 か月間は、自分のこれまでとこれからを含む、たくさんのことを考えるきっかけになりました。日々つけていた日記は 8 万字をこえるくらい、濃くて素敵な日々でした。せっかく法政に貴重なチャンスがあるのだから、それをつかんでください。

応援しています！

7. 写真



バンドンヤン難民キャンプ内の様子
商店などもあります



キャンプで子供たちの似顔絵を描きました
書いているときは笑顔でしたが、絵は奪い合いで破
られてしまいました



わたしがお昼ご飯を食べ終わるのを待って、
似顔絵を描いてほしいと言ってくれた方



SVA 職員の方たちから、
最終日に民族衣装のプレゼントを頂きました！

以 上